

セッション2

贖いの共同体と神の国

社会の中で信仰によって生きる

フィリス・クロスビー

贖いの共同体と神の国

目的

この論文は、クリスチャンの共同体こそが個人的な変革と文化への関わりのための主要な手段であることを示しながら、クリスチャンの使命とクリスチャンの共同体とを関連づけ、クリスチャンの共同体がどのようにして神の国をこの世の人々にとってより関わりやすいものとするかを示すものです。

目次

はじめに

第1章 クリスチャンの共同体という観点からクリスチャンの使命を再構築する

教会の使命は人々に贖いをもたらす共同体を築き、その中において、またそれを通して、この世にキリストを知らしめることです。(つまり、神の贖いの恵みを目に見えた仕方で示し、積極的にもたらす共同体を築くことです。)

第2章 贖いの共同体とは？

- A. 共同体の中心におられるイエス様
- B. 恵みによって変えられる
- C. 目に見え、関わりやすい共同体にする
- D. 文化に反する神の国の価値観

結論

はじめに

「灯台もと暗し」という言葉を聞いたことがあると思います。おでこに掛けているのに10分くらいメガネを探したり、手の中に握っているのに鍵を探したりすることがありますね。最もはっきりとしていることこそ、時には最も見つけ出すことが難しい場合があります。

聖書に記されているクリスチャンの共同体という概念も、とてもよく似ています。それは聖書のあらゆるところに記されていますが、その確かな重要性については見落としてしまいがちです。共同体についての聖書的な概念は、クリスチャン生活のすべての領域の枠組みをもたらすものです。

クリスチャンの共同体を正しく理解することによって、神の国に対する考え方が整えられます。個人的また社会的な変革、大宣教命令、伝道、弟子育成といったことは、すべて共同体に対する私たちの見方によって色づけられます。ですから、私たちが自分に与えられた使命をどのように理解し、実践していくかも影響されます。伝道は、ふさわしい共同体が備えられている環境では、多くの人たちが思うようなやりづらいことではなく、自然で楽しいものとなります。その結果、人々はキリストを信じるようになります。

共同体の概念は聖書のあらゆるところに記されている

あなたはこう思うかもしれません。「わかりました。でもクリスチャンの共同体という概念は本当に聖書のあらゆるところに記されているのでしょうか？」では、以下の箇所について考えてください。

- ・ヨハネ 17:21-23 - 神が永遠の共同体におられるように、私たちも共同体として生きるべきである。
- ・ルカ 6:12 - イエス様はご自身の働きを始めるにあたり、弟子たちを召し、共同体を形成された。
- ・マタイ 6:9-13 - 主の祈りは共同体として一緒に祈るように意図されている。
- ・マタイ 5:14 - 私たちは単に個々の光としてではなく、丘の上にある町となるように召されている。
- ・1 ペテロ 2:9 - 私たちは個人的に神の国の一員であるだけでなく、聖なる国民とされている。
- ・1 ペテロ 2:9 - 私たちは個人的に祭司であるだけでなく、王なる祭司たちである。
- ・ローマ 12:3-5 - 私たちは個々のからだではなく、一つのからだの部分である。
- ・エペソ 2:21 - 私たちは個々の建物ではなく、ともに神の宮とされている。
- ・新約聖書の大部分は、個人に対してではなく、グループに対して書かれた。

これらすべての箇所は、私たちがお互いを必要としていることを示しています。私たちはひとりであるときよりも、ともにいるときのほうがより大きな存在なのです。クリスチャンの共同体はクリスチャンであることの根幹に関わることなので、新約聖書の著者たちは神の国におけるその役割について決して疑うようなことはありませんでした。

「はじめに」の要点：

- －クリスチャンの共同体という概念は、聖書のあらゆるところに記されている。
- －クリスチャンの共同体は、神の国に対する見方を整えてくれる。
- －クリスチャンの共同体は、個人的な変革、文化に対する関わり、大宣教命令、伝道と弟子育成に関して、具体的な形や構造をもたらす。

第1章 クリスチャンの共同体という観点からクリスチャンの使命を最構築する

教会の使命は人々に贖いをもたらす共同体を築き、その中において、またそれを通して、この世にキリストを知らしめることです。

クリスチャンの使命とは、何よりも共同体としての私たちに与えられている使命です。個人に与えられている召命は、共同体に与えられているより広い召命の中に位置づけられ、それに従うべきものです。

神は何をしておられるのか？

神がこの世において働いておられること、また神がご自身の働きに、あるいは使命に参画するように私たちを招いておられることを理解することは大切です。しかし、私たちの使命は神の使命のすべてを網羅するのではなく、神のご計画全体の一部を担うものです。私たちは神の働きというより大きな視点をもって、自分たちに与えられた使命を理解する必要があります。

パウロはエペソ人への手紙で、私たちの個人的な救いよりも、さらに大きな神のご計画について書いています。エペソ 1 章 10 節には、救いとは「いっさいのもの」がキリストにあって一つとされ、和解されるという神のご計画であるとパウロは述べています。パウロは私たちの個人的な神との和解も神の目的の一つではあるが、それはクリスチャンの共同体において様々な民族の間にある「隔ての壁」を打ちこわすという、より広い和解をもたらすものであると説明しています。

そのような広い観点から、使徒パウロは私たちをクリスチャンの共同体とさせる和解の過程について述べています。私たちはともに、共同体において、全能なる方が住まわれる神の宮として建て上げられていると語っています。

「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」(エペソ 2:19-22)

この箇所は個人ではなく、共同体について記されています。私たちは神の御住まいとなるために、ともに建て上げられているのです。

この箇所を十分に理解するには、旧約聖書における宮は礼拝と奉仕のための場所として、共同体の中心的な存在であったことを理解する必要があります。それは人々のただ中に神がおられることを示す、目に見えるしるしでした。

使徒パウロはエペソ人への手紙で、神が同じ目的のためにどのように新しい宮を建てておられるか説明しています。ニューヨークに拠点を置くティム・ケラー牧師はこう言います。「神が建てておられる新しい宮は、恵みによって変えられた人々の共同体から成り立っている」¹ 今日、神の臨在と奉仕の場として目に見えるしるしとなっているのは、

レンガのできた宮ではなく、クリスチャンの共同体なのです。

この章の冒頭に「教会の使命は人々に贖いをもたらす共同体を築き、その中において、またそれを通して、この世にキリストを知らしめることです」と書きました。私たちはみことばを宣べ伝えたり、社会的な奉仕をしたり、文化に関わったりすることを含め、様々な仕方でキリストを知らせています。私たちの使命はそれら3つのすべてに関係しますが、さらにもうひとつ大切なことがあります。私たち教会は神の国を具体的に示し、イエス・キリストが彼に従う者たちのうちに、また従う者たちを通して臨在されることを目に見える仕方で表すべきものです。

私たちは何をすべきか？

エペソ 2:19-22 の観点から大宣教命令を見るなら、私たちの使命は神のより大きな使命に組み込まれていること、また神の宮を建て上げることが神の使命の一部であることがわかります。大宣教命令が成し遂げられることを求めていく中で、私たちは人々を神の宮として建て上げていく共同体へと導いていきます。その神の宮、あるいは共同体は、地上において目に見えた仕方で神を表し、他の人々が神を見、神を知ることができるようにします。クリスチャンの共同体はこの世にキリストを知らしめるための方法の一つですが、私たちが神とともに、また神への応答として、どのように生きるべきかという点で大切な役割を果たします。共同体は、救いときよめの両方を統合するものなのです。

私たちは共同体として使命を果たすということから逃れることはできません。つまり、私たちは贖いの共同体を築き、その贖いの共同体を通して使命を果たすことができるのです。贖いの共同体は、私たちの使命を成し遂げるための方法であり、目的でもあるのです。

「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。』」(マタイ 28:18-20)

大宣教命令は、イエス様があらゆるところにおいて主権を持っておられると宣言することに始まり、すべての時間を支配しておられると述べることによって終わるといふ、ものすごい箇所です。イエス様のこれらの宣言の間に、4つの部分からなる命令が挟まれています。私たちは **行き、弟子とし、バプテスマを授け、教える**ように命じられています。

行く— 私たちはすべての国の人々のところへ行くべきです。福音を拡大していくこの働きは、意識的にも、また自然発生的にもなされるべきです。私たちは福音を意識的に広める宣教師たちを新しい場所へ派遣すべきです。しかし、個々の贖いの共同体も成長し、自然発生的に拡大し、福音が地域に広まるようにすべきです。どちらの「行き方」も軽んじてはいけません。

弟子とする — 私たちは人々を弟子とするべきです。大宣教命令のこの部分は福音を宣べ伝えることや、人々を回心に導くことよりもはるかに大きなことです。私たちは回心した人々がキリストの弟子としてキリストとともにくびきを負うようになるまで努力する必要があります。

キリストの弟子となるにはエペソ2章にあるように「ともに成長する」が必要です。それは共同体においてのみなされることです。

私たちは神の宮として建て上げられていく中で、和解をもたらす者となることができます。キリストの弟子となることには、神の御住まいとなる贖いの共同体の一員となる必要があります。共同体そのものが、弟子として成長していく過程において不可欠なものなのです。

バプテスマを授ける - この箇所のこの部分は、大宣教命令における三位一体の側面を示しています。三位一体とは神が共同体として存在しておられることであり、私たちは新しくキリストを信じた人々をその聖なる共同体の御名によってバプテスマを授けるように命じられています。バプテスマを通して私たちは三位一体の神と一つとなり、ヨハネ 17:21-23 にあるように私たちは互いにこの上なく美しく結び合わされるのです。

教える - 私たちは弟子たちに、イエス様が命じられたすべてのことを守るように教えるべきです。イエス様は律法と預言者を廃棄するためではなく成就するために来られたといわれたので(マタイ 5:17)、この命令は創造から新しい創造に至る、聖書のすべての教えを含んだものです。私たちはイエス様のことばと行いとを守るべきです。

キリストの弟子としての新しいいのちは、それまでの生き方とあまりにも異なるので、私たちはすぐに「すべての命令を守る」ことはできませんし、一人の教師だけに助けをもらうこともできません。私たちは、他の人たちにイエス様が意図された生き方や愛し方の模範を示してもらいながら、贖いの共同体に生きることによって贖われた生き方を学んでいきます。ですから、贖いの共同体は目標であるだけでなく、私たちが本来どのように生きるべきかを学ぶための方法でもあるのです。

エペソ2章と大宣教命令とをともに見ると、私たちはキリストをこの世に知らせる贖いの共同体に生きるように意図されている、と結論づけることができます。これがクリスチャンに与えられている使命の本質です。

大宣教命令の全体を見ると、それが成し遂げられることは世界における伝道の働きを成し遂げることと同じではないことに気づきます。また、教会開拓とも同じではありません。伝道と教会開拓は使命の本質ですが、使命全体を網羅してはなりません。教会の使命は贖いの共同体(つまり教会)を築き、それを通してキリストのいのちのすべてを人々に示し、知らせることにあるのです。

第1章の要点:

- 教会の使命は人々に贖いをもたらす共同体を築き、その中において、またそれを通して、この世にキリストを知らせることである。
- 私たちはともに、共同体において、全能なる方が住まわれる神の宮として建て上げられる。
- 私たち教会は神の国を具体的に示すものであるべきである。
- エペソ2章と大宣教命令は、私たちがキリストをこの世に知らせる、贖いの共同体に生きるように意図されていることを示している。

第2章 贖いの共同体とは？

私たちの使命が贖いの共同体を築くことであるなら、論理的に次のような質問が浮かんできます。贖いの共同体とは何でしょうか？クリスチャンはどのようにして贖いの共同体となるのでしょうか？

何よりも、この世に対してイエス様を表そうとするすべての共同体の中心にイエス様がおられます。そして、共同体が贖いをもたらすためには、メンバーたちが絶えずイエス・キリストと出会うことで恵みによって変えられ続ける必要があります。第三に、共同体の外にいる人々もイエス様を体験することができるように、彼らにとって目に見え、関わりやすいものであるべきです。さらに教会は、この世の文化に対抗する神の国の価値観を築き、人々に別の生き方を提供する必要があります。

A. 共同体の中心におられるイエス様

*「…キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあつて、あなたがたともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」
(エペソ 2:20-22)*

イエス様は私たち教会の土台の礎石であるとともに、中心にもおられます。ですから、贖いの共同体とはそのただ中におられるイエス様を礼拝する共同体です。そこではイエス様の教えが教えられ、人々はそれに従い、イエス様のいのちを私たちに与えられた新しいいのちとして体験します。ですから、贖いの共同体においては、私たちが贖ってくださる神とともに歩んだ人々の物語を、くり返し思い起こし、語るのです。

レスリー・ニュービギン師は「多元的な社会における福音 (The Gospel in a Pluralist Society)」の中でこう述べています。「キリスト教会は… 私たちがささげることのできるすべての賛美を受けるにふさわしい方を畏れる中で、人々が真の自由、真の尊厳、真の平等を見出すところである。」²

ニュービギン師はさらにこう続けます。「キリスト教会は、隣人への思いやりをもたらす感謝をあふれるばかりに分け与える人々の集まりである。そして、隣人への思いやりが大いなる神の恵みの賜物があふれることによって生じるものであり、道徳的な大義名分のための献身を第一に表すものではないことが、その本質なのである。」³

あらゆるものを超えた価値ある方を賛美し、礼拝するという概念は、現代の懐疑主義に直接的にぶつかるものであり、今流行っている幻滅感に打撃を与えます。それゆえ、イエス様を中心とするすべての教会は、隣人に対してユニークな希望のメッセージとなるのです。

B. 恵みによって変えられる

あなたの友人や家族が、あなたが属しているクリスチャンの共同体を観察するなら、その人たちは何を見ることができのでしょうか？私たちの共同体は完璧ではないので、この質問は恐ろしい質問です。もし完璧であったなら、パウロ

はコロサイ人たちに互いに忍び合い、赦し合いなさいと戒める必要はありませんでした。パウロはキリストを信じている人たちも他の人に対して不満を抱くと仮定していたのです。

教会において人間関係の問題が起こることを仮定した理由の一つは、教会とは、通常は仲良くできない人たち、つまり、ユダヤ人と異邦人、ローマ市民と市民でない人たち、奴隷と自由人、男性と女性、といった人たちから成り立っていたからです。クリスチャンの共同体は人種、民族、経済、性別において多様な存在でした。

通常、敵であるはずの人々が愛と尊敬をもって調和し、ともに生きることができるなら、彼らは神の恵みを示す灯台となります。パウロは、神が私たちが神の宮として建て上げることを意図しておられることを語る少し前に、イエス様の血潮が民族間の敵意を打ち砕くと説明しています。エペソ 2:1-18、特に 14 節から 16 節で、パウロはイエス様の一致をもたらす働きについて述べています。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において敵意を廃棄された方です。…このことは二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」

もちろん、同じ文化をもった共同体においても、罪によって墮落した人間は調和のうちに生きることに困難を覚えます。しかし私たちの罪深さは神の恵みを示すことができます。愛と赦しの力は、私たちが最悪の状況において表れます。私たちに親身に関わる人たちがありのままの私たちを受け入れながら、チャレンジを与えてくれます。このような恵みによる対峙は、変革をもたらします。私たちがキリストを信じる兄弟姉妹に対してイライラするとき、恵みによって個人的な変革を体験することができるかと理解するなら、そのような対峙は私たちに励ましをもたらしてくれます。

贖いの共同体は、イエス・キリストの愛と恵みによって変えられ続けている人々によって成り立っています。自分の罪深さと私たちが贖うためにどれほどの犠牲が支払われたかを理解するとき、私たちは聖霊に心を開き、謙遜と変革の過程へと進んでいくことができます。私たちの人生における神の恵みを本当に理解するなら、私たちは他の人々に恵みをもたらす管となります。そこに到達することは個人的にも、共同体としても容易なことではありませんが、贖いと和解をもたらす共同体となるには必要なことなのです。

C. 目に見え、関わりやすい共同体にする

窓と扉

クリスチャンの共同体は、キリストを信じていない人々にとって目に見え、関わりやすいものとしてデザインされています。私たちの共同体を通して、人々が「主のすばらしさを味わい、見つめる」ことができるようにします。私たちは窓と扉を作ることによって、キリストを信じていない人々が神に近づき、神の民のうちに、そして神の民を通して神を見ることができるようになります。

共同体への窓 - この世の人々は私たちの行いと関係を通して、イエス・キリストを探し、見出す必要があります。私たちは共同体に窓を築くことによって、人々が私たちのことを見つめることができるようになります。私たちが実際にどの

ような者であるかを見てもらうのです。イエス様は、私たちが互いに愛し合うなら、キリストを信じない人々は私たちが主の弟子であることを知る、と言われました。愛はこの世がイエス様を見、知ることができるようになる窓の一つです。

愛の窓:

愛はクリスチャンの共同体における一番の特質です。イエス様は犠牲を払い、差別せずに愛されました。そして、私たちが同じように人々を愛するように命じられています。これは聖書全体に記されている命令の中で成し遂げることが最も難しい命令の一つかもしれません。実際、愛は人間の性質に明らかに逆らうものであるがゆえに、愛することはクリスチャンであることを示す顕著な特徴です。私たちの愛は家族、友人、クリスチャンの共同体にとどまるのではなく、私たちの隣人や敵に対してまで分かち合うべきものです。

私たちが互いに愛し合うとき、人々は私たちがイエス様の弟子と見なすようになります。

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」(ヨハネ 13:34-35)

互いに愛し合うことは簡単なことではありませんが、一致の絆をもたらします。

「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め…」(コロサイ 3:12-17)

私たちは、一人では神が意図された愛のレベルにまで達することができません。それを共同体においてする必要があります。この世においてキリストに似た者となること以上に、この世にキリストを示す良い方法はあるでしょうか？

「神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちがこの世にあってキリストと同じような者であるからです。」(1ヨハネ 4:16-5:1)

ロドニー・スターク師は「キリスト教の台頭 (Rise of Christianity)」の中で、初代教会のクリスチャンたちが神の愛をどのように理解していたかがこの世の人々がキリストを見るための窓をもたらしたことについて説明しています。「…神が人類を愛しておられるので、クリスチャンは互いに愛し合わなければ神を喜ばせることができない、という考え方は全く新しいものであった。そして、おそらくより革命的であったのは、クリスチャンの愛と慈善は家族や部族の枠組みを越え『主イエス・キリストの御名を、至る所で呼び求めているすべての人々』(1コリント 1:2)にまで及ぶという原則であった。実際、愛と慈善はクリスチャンの共同体をも越えなければならないものである。」⁴

クリスチャンの愛はすべての人々に及ぶべきものです。それはあらゆる境界線を越えるべきであり、それによって、

多くの人々がイエス様に従う者たちを通してイエス様に会うことを可能にするのです。

和解の窓:

おそらく私たちが共同体として抱いている最も影響力のある窓は、和解の窓でしょう。聖書が示す和解にはいくつもの側面があり、人と神との和解だけでなく、民族間の和解も含まれています。人間同士のレベルにおける和解は、人が神と和解する可能性を持っていることを前もって示すものであり、クリスチャンの信仰にとって本質的なことです。

エペソ 2 章をもう一度見てみましょう。この箇所では和解というテーマが強調されています。この箇所は個人に適用することもできますが、具体的にはユダヤ人と異邦人という民族間の和解について述べています。この箇所に、私たちはかつてキリストの敵であった者たちとともに和解し、それゆえ私たちはともに神の御住まいとして成長していると記されていることに注目してください。

「ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにおいて、あなたがたとともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」(エペソ 2:11-22)

この箇所は個人だけでなく、社会のあらゆる領域に関係します。キリストは教育レベル、階層、職業、性別、都市と地方の区別などを含む、あらゆる隔ての壁を打ちこわされます。恵みによって変えられた神の民である私たちは、自分たちのクリスチャンの共同体において、この和解を導くことができます。

和解は 21 世紀の都市における宣教には不可欠な要素です。世界の様々な都市は、様々な人種や国籍の人々をひきつける磁石のような存在です。都市に移住してくる多くの人々は、経済的に貧しく、社会から疎外され、教育レベルや収入の高い人々から蔑まれています。さらに、都市に来る人々の多くは他の国々から来た人々で、しかも、かつてその国と戦争をしたことがある国から来ることもしばしばあります。和解すべき人々のリストは想像以上に長いものです。それには、家族や性別といったとても個人的な和解だけでなく、人種や国籍といった地球規模の和解も含まれます。

私たちの教会における関係、特に愛と和解は、この世の人々がイエス様を見る窓となります。私たちの関係がキリストの愛と神の国の価値観を本当に反映しているなら、人々はよりはっきりとキリストを見出し始めます。愛と和解は、すべての共同体に供えられた、人間関係における2つの窓なのです。

人々を中に招き入れ、外へ送り出す扉 - 窓がこの世の人々がイエス様を見るためのものであるなら、扉はキリストを知らない人が中に入り、イエス様を体験するように招き入れるためのものです。私たちの共同体への扉は、外の人々が中に入り、主のすばらしさを味わい、見つめなさいという神の招きに応えることができるように、開かれています。私たちの共同体に人々を歓迎するとき、彼らはまずイエス様を体験します。もちろん、扉には2つの方向に開きます。外の人々を中に招き入れるだけでなく、共同体の中にいるクリスチャンたちがキリストの愛をこの世にもたらすために、彼らを外へ送り出します。

もてなしの扉

「兄弟愛をいつも持っていなさい。旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。」(ヘブル 13:1-2)

もてなしは、クリスチャンとしての共同体についての考え方の土台となる聖書的な概念です。もてなしは人々のためになされるものですが、それは最も深い意味においては、神が私たちに与えてくださったもてなしに対する応答なのです。その意味において、もてなしには道徳的な側面があります。もてなしは、クリスチャンが行う必要のあることなのです。

聖書の示すもてなしは、家族や友人をもてなすことをはるかに越えたものです。私たちの周りにはいる人々だけでなく、さらに多くの人々をキリストの御名によって愛し、仕えるために、自分自身を明け渡すことです。私たちが見ず知らずの人に心を開き、人としての深いつながりを提供するとき、その人の最も深い願いを満たすことができます。ヘンリー・ノウエン師は「傷ついた癒し人」の中でこう述べています。「もてなしを通してこそ、人間のたましいはいやしを見出すのです。」⁵

もてなしという言葉は、歓迎、惜しまずに与える心、思いやり、を示すものです。真のもてなしは、惜しまない心で相手を中心とすることです。もてなしを通して、ホストはゲストの必要を満たし、心地よくいられるように心を配ります。もてなしは「私のゲストであるあなたは大切な人です」ということを伝えるものです。

人に食事を提供したり、家に招いたりするとき、その人との関係を築き、深める機会となります。その人を歓迎することを通して、私たちがその人を愛し、受け入れていることを伝えることとなります。もてなしには、ゲストが私たちの愛に身をゆだねてくれている中で、その人が心地よくいられるように責任を持つことも含まれます。このような信頼と責任を通して、私たちは他の人々のことを知るようになるのです。

惜しまずに与える心は、もてなしの大切な一部です。惜しまずに与える心によって、自分が犠牲を払って、相手に何かを提供します。その犠牲とは時間、労力、あるいはお金かもしれません。しかし、私たちは人をもてなすにあたり、惜

しまずに与える必要があります。時には、相手の話をよく聴くことこそが、その人に最も惜しまずに与えるプレゼントであるかもしれません。

奉仕の扉

社会的な奉仕は愛のための愛です。それはクリスチャンがこの世に出て行き、キリストが愛しておられる人々のために、また助けるために、私たちが生活するための扉です。いつもではありませんが、しばしばこの愛の行いは、言葉によって強調されたり、補われたりします。

クリスチャンの奉仕には、慈善の行いと正義への献身が含まれます。以下の箇所に、クリスチャンは教会だけでなくすべての人に対してふさわしい行動をするように命じられていることに注目しましょう。私たちはキリストのからだの外にいる人々に対して、善を求め、正義を尊重し、平和を保ち、良い行いをし、親切にし、思いやりを示し、尊敬するようにと命じられています。

「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。」(1 テサロニケ 5:15)

「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。」(ローマ 12:17-18)

「ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行いましょ。」「(ガラテヤ 6:10)

「主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし…」(2 テモテ 2:24)

「あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと権威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい。また、だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい。」(テトス 3:1-2)

「すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」(1 ペテロ 2:17)

仕事の扉

私たちの多くが週に数回通り抜けている扉があります。それは私たちの玄関です。毎朝、仕事に出かけるとき、私たちは自分を世間から隔離し、クリスチャンの共同体の中に安全にいることはできません。福音の光の中で仕事を理解することができる人にとって、これはすばらしい機会です。

私たちは主に対して仕事をするように命じられています。それには2つのことが含まれます。一つは誠実さ、言行の一致、正義といった神の国の価値観に沿って働くことです。ある文化においては、このことだけでも常識と大きく異なっているため、福音を説明するのに十分な機会をもたらしてくれます。

しかし、主に対して仕事をするには、もう一つの側面があります。創世記には、私たちは神のかたちに造られた者として、この世に対する支配権が与えられています。ある人は多くのものを支配し、ある人はほとんど支配していな

いかかもしれません。大切なことは、どのように支配するかということです。私たちの支配権とは、基本的には私たちがコントロールできるものを指します。キリストを映し出すことができるように自分のコントロールできる範囲を定めるなら、私たちは主に対して仕事することになります。

福音宣教の扉

福音を宣べ伝えることは、人々をキリストにある信仰に、そしてクリスチャンの共同体に導く扉です。友人たちがキリストとともに生き、歩むことができるように、私たちはこの扉を通して彼らを招き入れます。しかし多くの場合、友人たちはまず私たちの共同体に入り、それから信仰へと導かれます。

共同体は、私たちの未信者の友人たちがキリストを信じる信仰へと進む過程において、複数のクリスチャンたちと関係を持つことができる場となるので、伝道において重要です。未信者はそのようにして神の国の幅広さを体験し、やがて王である神ご自身と出会うようになります。

使徒パウロは、コリント人への手紙第一の1章で「キリストのついでにあかしが、あなたがたの中で確かになった」ためにコリントの教会に感謝しています。キリストの真理は、クリスチャンの共同体の中において確認されるのです。

未信者はまずクリスチャンの共同体においてイエス様を体験することができますが、福音をより十分に理解するには、しばしば言葉による説明が必要です。私たちの共同体の究極的な目標は、私たちの友人が私たちの愛ではなく、キリストの愛を体験することです。人々をキリストに導くために、福音を宣べ伝えることを大切なこととして位置付けることは重要です。友人たちを私たちの共同体に導きながら、キリストを信じる信仰には導かない、ということはしたくないからです。

D. 文化に対抗する神の国の価値観

どの社会にも、福音のある部分と共鳴する文化があります。そのような文化的要素は神の真理をはっきりと示し、容易に受け入れることができます。それとともに、どの社会にも、福音の別の部分との関わりにおいて相容れないものがあり、個人的にも、制度的にも、聖書的な価値観に反対されることがあります。

世間的に認められている真理、つまり、社会生活の土台となっている仮定や信条は、福音の真理に沿っているか、いないかのどちらかです。世間的に認められている真理が神の国の価値観と衝突するとき、クリスチャンの共同体は2つの大切な役割を果たします。第一に、私たちの共同体、教会は、社会的に受け入れられている価値観の襲撃から自分たちの信仰を守る場となります。第二に、クリスチャンたちはキリスト教会を通して、世間的に認められた真理に立ち向かい、福音に沿ったものへと導くことができます。それは、私たちは文化に対抗する神の国の価値観を示し、生き抜くことを通してなされます。

ここで注意しておくべき大切なことは、私たちはこの地上において、クリスチャンのユートピアや天国を造ろうとしているのではないことです。私たちは社会を完全なものにすることはできませんが、ある程度、影響を与えることができ

ます。このことについては、文化に対する関わりについて述べているところで詳しく見たいと思います。

信仰の保護者としての共同体 - 共同体は信仰の保護者として存在するように意図され、クリスチャンたちが文化的な要求に妥協することなく、最も困難と思える信条を生き抜くことを可能にするものです。

クリスチャンの価値観は、一般社会における価値観と頻繁に衝突します。それはイエス様がこの世における別の生き方を、また私たちの行いのすべてにおいて別の方法を示しておられるからです。私たちのキリストにある新しいのちから生まれる新しい生き方は、墮落した私たちの物の見方を(時間をかけて、私たちの理解度に応じて)矯正していきます。クリスチャンたちが共同体として集まり、神の価値観を生活にあてはめていき始めるにつれて、私たちは互いにチャレンジし合い、文化に対抗する、新しい道を示すこととなります。

クリスチャンにとって普通のこととなるべきと教えているキリストの命令の多くは、文化に対抗するだけでなく、私たちの直観や経験にもそぐわないものです。敵を愛する、迫害する者のために祈る、もう片方の頬を向ける、必要のある人に仕える、自分よりも貧しい人を顧みる、といったことは一人で抱えることが不可能、あるいは困難なことです。より大きな共同体によってのみ、多くの人たちはこれらの価値観に従って生きることが可能になるのです。

権力、財産、セックス、立場に対する私たちの見方は、私たちの文化によって自然と形づくられています。クリスチャンの共同体は私たちの態度を改めて作り直す場となります。それは、文化ではなく、そのグループこそがキリストの価値観を普通のものとしてくれるからです。

贖いの共同体は、キリストに対して、キリストの価値観によって忠実に生きることが普通であるとみなされる場です。ですから私たちの共同体において、神の愛と恵みを他のクリスチャンに、またこの世の人々に表すことは普通のことであるべきです。そのグループによって倫理的、道徳的な基準が高く保たれ、キリストに似た行いをすることが普通のこととなります。このように、クリスチャン生活を普通のこととすることによって、共同体の一人一人のメンバーは社会でなされているのとはしばしば異なる生き方をすることがしやすくなります。また、新しくクリスチャンになった人たちがクリスチャンとはどのような者であり、キリストに信頼し、従うとはどういうことかを学ぶこともできます。

クリスチャン生活における多くの行いは、個人的また私の部分と、共同体また公の部分の両方の要素があります。たとえば、成長は個人的にも、共同体としても起こります。伝道は個人としても、グループとしてもなされます。個人的にも、公にも礼拝し、奉仕についても個人的にも、共同体としても責任を負います。グループにおいてこのような行いが普通のことと見なされるようになると、個人としてグループから離れたところでも、クリスチャンとして歩み続けることがしやすくなります。

文化に関わる共同体 - クリスチャンが文化に関わるとは矛盾した概念だと思う人もいます。「キリストのために聖別される」という考え方が、どういうわけか「この世から隔離して生きる」ということに翻訳されてしまっているからです。しかし、私たちはこの世の者ではありませんが、この世において生きるように召されています。

しかし、文化に関わるとはどういうことでしょうか？また、教会はどのような役割を果たすのでしょうか？社会生活において、私たちはどのように神の国を示すのでしょうか？

クリスチャンのこの世に対する関わり方について、イエス様が私たちに地の塩、世の光となるように召しておられることに注目しましょう。この箇所は私たちが共同体としてどのように文化と関わり、すべての人々に神の国の価値観を別の生き方として示すべきかが記されています。

「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」(マタイ 5:13-16)

この箇所で、イエス様が語られた「山の上にある町(city)」が何を指しているかを理解することが大切です。これは、私たちが福音をもたらそうとしている町のことではありません。私たちは地上にクリスチャンのユートピアを造ろうとしているわけではありません。これはキリストのからだを指しています。私たちは、人々が神の栄光を見ることができるよう、光を輝かせている山の上にある町(city)のような存在です。私たちの光は、人々が決して見過ごすことのできない光です。

イエス様がご自身のからだ、つまりクリスチャンの共同体を町(city)と言われているのですから、私たちは聖アウグスティヌスが「すべての町(city)には2つの町(cities)がある。神の町(city)と人の町(city)だ」といったことに同意することができます。あなたの町(city)における教会は神の国を目に見えるものとして表したものであるべきです。文化に反することで私たちが大切にしているすべてのことは、イエス・キリストの主権のもとに別の生き方として示されるべきです。つまり、どのように愛によって互いに関わり合うか、人間関係の衝突や人種間の衝突にどのように関わるか、セックス、権力、財産、地位をどのようにとらえるか、といったことは、私たちの文化に対して、神の国における別の生き方を示すいくつかの方法なのです。

イギリス国教会の牧師、ジョン・ストット師は「クリスチャニティ・トゥデイ」によるインタビューの中で、マタイ 5:6 のイエス様の教えについて次のように説明しています。

「私は社会的変革について、イエス様ご自身が山上の説教においてマタイ 5 章で用いられた塩と光のたとえについて、いろいろと思い巡らしました。「あなたがたは地の塩です。あなたがたは世界の光です。」私には、これらのたとえが少なくとも3つのことを含んでいると思われま

一つは、クリスチャンは未信者とは大きく異なった存在であり、もしそうでなければ、そうあるべきだということです。イエス様は2つの共同体を対比して示しています。片方には世があり、もう片方にはあなたがた、この暗闇における光があります。イエス様は、光が暗闇と異なるように、また塩が腐敗していくものと異なるように、私たちもこの世と異なる存在であるとほのめかしています。

第二に、クリスチャンは未信者の社会に浸透していく必要があります。塩は塩入れの中にとどまっていたら何の役にも立ちません。光はベッドやバケツの下に隠しては何の役にも立ちません。それは暗闇に浸透す

べきなのです。ですから、どちらのたとえも、私たちは単にこの世と異なった存在となるだけでなく、社会に浸透していくために召されていることを示しています。

第三に、これはより物議をかもし適用ですが、塩と光のたとえは、クリスチャンは未信者の社会を変えることができることを示しています。塩も光も効果的な日用品であることを考えれば、このたとえはそのことを意味しているに違いありません。塩や光は置かれたところの環境を変えてしまいます。塩は細菌による腐敗を防ぎます。光は暗闇を追い出します。これは社会的な福音を復活させようということではありません。私たちは社会を完全なものにすることはできません。しかし、改善することはできるのです。」

クリスチャンの共同体(山の上にある町 city)は、文化に関わる唯一の手段ではありませんが、おそらく、文化に関わり、社会を変革するための主要な手段でしょう。

イエス様の教理が現代の都市社会の現状に対して、どのようにチャレンジを与えているか考えてみましょう。クリスチャンの共同体は別の生き方を模範として示す、最善の方法なのです。

あるグループが社会の価値観とは異なる価値観を適応し、異なった生き方をし、その違いがより広く社会に認められるなら、別の生き方の模範が示されたこととなります。初代教会がイエス様の教理をどのように生き抜き、別の生き方を提示したか見てみましょう。

初代教会のクリスチャンたちがローマ社会に提示した、別の生き方について考えましょう。紀元 1 世紀と 2 世紀のローマ社会において、残虐に人を殺すことは、広く普通のこととして受け止められていました。残虐な殺人は観衆を喜ばせるスポーツでした。剣闘士たちは大観衆の前で死ぬまで戦いました。競技場では、男性も女性も、野獣に噛み殺されました。剣闘士の決闘は、最も人気のあるエンターテインメントの一つでした。

ロドニー・スターク師は「キリスト教の台頭」の中でこう述べています。「気まぐれな残虐さと、身代わりに人を殺すことを楽しむ風潮に満ちた世に対して、キリスト教は人間に関する新しい概念をもたらした。」⁶ 神が人のいのちを大切にしておられ、殺人を犯してはならないと命じられているので「クリスチャンたちは残虐さと観衆となることの両方を非難した。…クリスチャンたちは異教の慣習において普通に見られる残虐さと全く相容れない道徳的なビジョンを、効果的に広めていった。」⁷

クリスチャンたちが愛、慈善、あわれみ、正義という教理を、それらに反する文化の中で生き抜いたからこそ、神の国の価値観は築かれ、教会は別の方法を示すことができたのです。イエス様のゆえに、クリスチャンたちは生活のすべてにおいて異なった見方をしました。彼らは結婚を聖なるものと見なし、女性を価値ある存在と受け止めました。中絶や幼児殺害に反対し、貧しい人々、病人、必要のある人々を顧み、人種、階層、性別の壁を打ちこわしました。スターク師はこう述べています。「…キリスト教の言葉と教えが日常生活において実践されることによって、キリスト教は悲惨な状況にあった人々の生活を和らげることができたのである。」⁸

マタイに記されている塩と光の戒めは、単に個人に向けてではなく、共同体に向けて示されています。私たちは一人

では町(cities)になることはできません。ですから、私たちは全く異なった仕方に関わるべきであるというストット師の結論は、共同体においても当てはまるものなのです。私たちは共同体として社会に浸透し、社会を変革する鍵は共同体にあるのです。

第2章の要点:

- この世に対してイエス様を表そうとするすべての共同体の中心にイエス様はおられる。
- 贖いの共同体は、イエス・キリストとともに恵みによる対峙によって変えられ続けている人々によって成り立っている。
- 共同体の外にいる人々もイエス様を体験することができるように、共同体は彼らにとって目に見え、関わりやすいものであるべきである。
- 教会は、この世の文化に対抗する神の国の価値観を築き、人々に別の生き方を提供する必要がある。

結論

人々にイエス様を信じるように招くとき、私たちはキリストとの新しい関係を築くことだけでなく、現実に対する全く新しい理解を受け入れるように導きます。ある人がイエス様を受け入れるには、その人がすでに現実をどのように理解しているかにしたがって、この世についてのイエス様の説明がもっともであり、理にかなっていると納得する必要があります。

何がもっともであるかという思考構造は、ある社会において受け入れられている仮定や信条を支える文化的に構築されたものです。キリスト教会は、すでに存在している世界観にチャレンジすることによって、福音がもっともであり、理にかなったものであると理解することを助ける新しい構造をもたらすことができます。

私たちが本当に福音のストーリーのうちに没頭し、教会もその福音によって整えられることによるのみ、他の人々のための新しい思考構造を築くことができます。そして、クリスチャンとして愛を示し、この世におけるキリストの恵み、あわれみ、正義といった価値観を生き抜くことを通して、福音が理にかなったものであることを示すことができます。

ですから、レスリー・ニュービギン師はこう述べています。「福音が私たちの社会の人々の生活にチャレンジを与えたとしたら…それは地域教会から始まるムーブメントによってのみ起こるであろう。そこでは、新しい創造が存在し、知られ、体験され、男性も女性もキリストを宣べ伝えるために社会のあらゆる領域に浸透し、まだ隠されている幻想を取り除き、福音の光によって社会のあらゆる領域を照らすことになる。しかしそれは、地域教会が自分たちのいのちのことだけを気にする内向きな姿勢を捨て去り、自分たちが社会生活全般における神の贖いの恵みを示すし、器、前味として、メンバーでない人たちのために存在していることを認識するときのみ起こることである。」⁹

私たちのクリスチャンとしての共同体は、メンバーでない人たちのために存在しているのです！キリストに似た者となるためのなんとすばらしい方法でしょうか。贖いの共同体となることは、してもしなくてもいいことではありません。キリストが死を通して私たちに与えてくださったいのちを生きることは不可欠なのです。また、それはクリスチャンとして使命を成し遂げるためにも不可欠です。

教会の使命は人々に贖いをもたらす共同体を築き、その中において、またそれを通して、この世にキリストを知らしめることです。つまり、神の贖いの恵みを目に見えた仕方です。積極的に人々に贖いをもたらす共同体を築くことです。

あなたがキリストに似た共同体を築くという考えを聞いて、ひるんでしまったとしても、あなたは一人ではありません。私たちが目指すべきことは完璧ではなく、キリストに似た者たちへと変えられていく過程を進んでいくことです。目標はどこかに行って、新しい完璧な共同体を見つけるのではなく、私たちが今置かれている状況において取り組み、この地における神の国を具体的に示す共同体へと進んでいくことです。

真のクリスチャンの共同体は、十字架の影に身を置くときにこそ可能となります。イエス・キリストの愛と恵みによって人々が変わるときに可能となります。幸いなことに、イエス様ご自身が私たちのために祈ってくださいました。ヨハネ 17 章、特に 20 節から 23 節について考えてください。「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいたるやうに、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」

贖いの共同体と神の国

- 1 ティム・ケラー, Redeemer Presbyterian Church, New York, NY, *The Theology of Christian Community*, 2005.
- 2 レスリー・ニュービギン, *The Gospel in a Pluralist Society*, 1989, Eerdmans Publishing Co., Grand Rapids, p. 228.
- 3 レスリー・ニュービギン, *The Gospel in a Pluralist Society*, 1989, Eerdmans Publishing Co., Grand Rapids, p. 228.
- 4 ロドニー・スターク, *The Rise of Christianity*, 1996, HarperCollins, San Francisco, first paperback.
- 5 H.J.M. ナウエン, 傷ついた癒し人, 日本キリスト教団出版局 2005
- 6 ロドニー・スターク, *The Rise of Christianity*, 1996, HarperCollins, San Francisco, first paperback, p. 214.
- 7 ロドニー・スターク, *The Rise of Christianity*, 1996, HarperCollins, San Francisco, first paperback, p. 215.
- 8 ロドニー・スターク, *The Rise of Christianity*, 1996, HarperCollins, San Francisco, first paperback, p. 213.
- 9 レスリー・ニュービギン, *The Gospel in a Pluralist Society*, 1989, Eerdmans Publishing Co., Grand Rapids, p. 232.